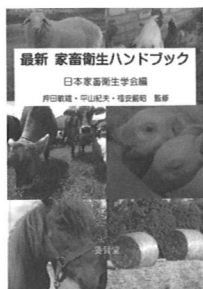


書籍紹介



『最新 家畜衛生ハンドブック』

日本家畜衛生学会 編

2014 年 10 月 養賢堂 発行

536 頁

定価 (本体 10,000 円+税)

高野結衣・浅川満彦 (酪農学園大学獣医学群)

獣医学は正常な動物の形態・機能、病気 (異常) の診断・治療、予防法の開発をする応用科学である。一般に、病気を治療する (派手な) 臨床分野に目が向きやすいのだが、疾病論的にもっとも効率的なのは、動物を病気にさせないこと (予防) である。が、実際の予防手段はごくごく当たり前のことの連続で、獣医学徒の多くには地味に見えてしまうのであろう。地方公務員獣医師の慢性的な定員割れとなっているが、これは国民の健康を脅かす深刻な危機的事態なのである (浅川, 2016a)。だが、家畜衛生では、今、牧野や畜舎に侵入する野生鳥獣の対策が、その要になりつつあり、この点で野生動物医学とも密接に関わっている。そのため、浅川のゼミ生には、当初から野生動物医学を基盤にして公務員獣医師になることを目指す学生が所属することもある。今回、書籍紹介をする高野もその 1 人である。そこで、彼女にはこの本の概要を述べてもらい、浅川がささやかな補足をした。 (文責 浅川)

本書は 1988 年刊『新版家畜衛生ハンドブック』の改訂版であり、以下のセクションから構成されている; 序論、家畜の衛生管理、栄養と飼養衛生、繁殖衛生、一般疾病とその予防、感染症とその予防、畜産物の衛生、畜産廃棄物と環境、家畜衛生に関する法的規制。本書タイトルにもある「家畜衛生」とは、「家畜を群として捉え、疾病の発生予防に重きを置き、家畜の健康を維持・増進し、生産性を向上させ、畜産振興に寄与することを目的としている」、すなわち安心安全な畜産物を製造・提供するために肝要な概念と言える。その一端を担うもの (施設) として、家畜保健衛生所があげられる。公務員を志望する私 (高野) にとって、こういった概念はしっかりと身に付けるべきであろうと考え、書評の筆を執らせていただくこととなった。各章とその概要を次に列挙した: 第 1 章 家畜の飼育環境について、温度などと言った物理的環境から畜舎設計、防疫、育成期ごとの特徴や留意点; 第 2 章 栄養素にフィーチャーし、無機物・ビタミンが表でまとめられ、動物種ごとの代謝病を著述。特に、飼料添加物・農薬、有害植物、カビ毒、重金属による中毒など; 第 3 章 繁殖について動物種

ごとにまとめられ、繁殖生理や繁殖障害、人工授精など。しかし、獣医学課程の講義で習ったものとほぼ遜色ない内容で、専門家以外には少し難しい内容; 第 4 章および第 5 章 疾病についてのセクションで、感染症は病名・病原体・症状・対策の項目が一覧表でまとめられていた。一般疾病については、総論的に体表の変化や食欲、脈拍・呼吸、体温、歩様の変化など、視覚・聴覚・触覚で飼養者でも (むしろ飼養者の方が) 把握し易い事項に加え、炎症や創傷についても詳細に述べられていた。また、動物種ごとに各器官系の一般疾病がまとめられているのも知識の整理に役に立つ; 第 6 章 畜産物、すなわち、生乳、食肉、鶏卵に関しての衛生から流通管理まで広汎に著述; 第 7 章 畜産廃棄物、つまり、家畜の排泄物や屠畜した際に派生した不要な皮、骨肉、血液などや排泄物の処理法・再利用法; 第 8 章 家畜伝染病予防法、薬事法、食品衛生法、と畜場法など計 9 つの法規についての概要。全体的に図表や写真が多く、比較的読みやすい印象であった。付録の CD が付いており、例えば第 2 章の有害植物の写真も収録されていた。これらの情報は文字だけで覚えていてもしょうがなく、とても親切であると感じた。畜産、臨床、教育など関係者向きにも耐えるよう広範な視野のもとに構成されたとあるが、学生である自分 (高野) にとっても、生産動物に関する科目 (獣医衛生学、感染症学、繁殖学、ハードヘルズ学、食品衛生学、公衆衛生学、大動物外科・内科学、病理学、生理学など) が網羅的にまとめられており、必携の書として手元に置きたいと強く感じた。

(文責 高野)

本書が刊行されたのがつい一昨年のことであったことから、まず、家畜伝染病予防法が大きく改変された 2011 年秋以降の情報が取り入れられているので (450 頁から 461 頁)、知らないうちに法律違反をしていたとならないためにも、是非、一読しておきたい。また、この年には東日本大震災もあったが、この災害は畜産業にも強い影響を与え、放射セシウム汚染 (445 頁から 446 頁)、さらには OIE からの「無視できる BSE リスクの国」認定 (103 頁)、iPS 細胞応用の可能性 (134 頁) など浅川が学んだ 80 年代とは異次元の記載が続いていた。これらは断片的に報道されるなどとはしても、家畜衛生学の学問体系と具体的にどのように連結するのかが難しい。シニア獣医師の体系的アップデートをする手助けとなろう。なお、個人的には、第 5 章に目が釘付けになった。日本生態学会から感染症の防除対策についてまとめるように依頼があり、相当苦悶しながら一文を寄稿したが (浅川, 2016b)、当該章には、実に、判りやすく情報が整理されていた。また、道庁などとともに苦労しつつ野鳥疾病マニュアル作成をしたが (浅

川, 2014), この章とその前の第4章, 特に, ニワトリ, ウズラ, ダチョウ, カモなどに関する記述は大変ありがたい。両仕事の改訂版が計画されるのなら, しっかり参照したい。

(文責 浅川)

引用文献

- 浅川満彦. 2014. 診断マニュアル. (北海道立総合研究機構・北海道大学・酪農学園大学 編)平成23～25年度重点研究報告書『野生鳥類由来感染症の伝播リスク評価及び対策手法の開発』, 北海道立総合研究機構, 札幌: 101-116.
- 浅川満彦. 2016a. 酪農学園大学獣医学類卒業者の就職動向とその対応. 獣医学振興 (5): 37-40.
- 浅川満彦. 2016b. 防除対策 (隔離, ワクチン, 環境管理), 感染症の生態学 (川端善一郎 編), 共立出版, 東京: 323-336.